

『虞美人草』の酒井抱一

Junko Higasa 2013.11.3

銀時計に乱れた虞美人草である藤尾の亡骸に添う銀屏風に秘められた重要な意味は以下の3点である。

1. 酒井抱一代表作は銀屏風『風雨草花図』である。
2. 尾形光琳『風神雷神図』の裏側に描かれている。
3. 「銀屏風」の裏は「金屏風」である。

第一に、代表作というのはその人の人生そのものである。酒井抱一は姫路藩主の次男であった。この時代、次男は長男の控えである。長男が死などで不在になったときにだけ家督を継げる。もし長男が無事で、さらに結婚して息子が出来れば、財産分与どころか居場所がない。他の武家の養子になるか、町人になる以外に生きる道はない。抱一も町人になった。その立場は画の通り「風雨」にさらされる運命を持っていた。女ながら藤尾の立場も同等である。

第二に、虞美人草である藤尾を描いた裏にあるのは彼女の内心、即ち雨を呼ぶ風と雷である。風と雷は藤尾の恋情そのものである。

第三に銀の裏が金といえ、銀時計を持つ小野さんが金時計を目指していることにつながる。

以上の事から私は、漱石は『風雨草花図』の草花を「虞美人草」に転化して描いたと見る。

抱一の画には夏と秋の草花が描かれている。漱石の『虞美人草』入稿は5月28日、9月7日には脱稿後の手紙を書いているので、まさに『虞美人草』は俳句の夏から秋の間に書かれた草花図であった。